

AI 時代の感情社会研究会

— 中間報告書 —

2026 年 9 月 10 日

株式会社電通総研

ヒューマノロジー創発本部

Quality of Society センター

目次

第 1 章	はじめに	2
1.1	設立背景と目的	2
1.2	研究会の基本的な方向性	2
1.3	現状の AI 観整理	3
1.4	研究会の構成	4
第 2 章	テーマ研究	6
2.1	感情社会学と障がい学の視点から（岡原 正幸）	6
2.2	制作室に同居する存在としての AI（島影 圭佑）	6
2.3	AI で変わる人間の感情と意思決定——意思決定研究の観点から（岡田 芳樹）	7
2.4	非人間対象との関係性の変容——愛着理論の視点から（座間味 和）	8
第 3 章	Keio-SPRING のワークショップから考える	10
3.1	実施概要	10
3.2	プログラム	10
3.3	得られた示唆	10
第 4 章	アンケート調査結果	12
4.1	調査概要	12
4.2	調査結果＜人と AI の関係性に関する認識—現在と 30 年後を比較して—＞	12
4.3	まとめ・考察	14
第 5 章	中間総括と今後の展望	15
5.1	中間成果の整理	15
5.2	今後の課題と展望	15

第1章 はじめに

1.1 設立背景と目的

生成AIの急速な普及により、AIは単なる情報処理の道具を超え、人びとの対話相手や相談相手として日常生活に浸透しつつある。このようにAIの役割が変化しているにもかかわらず、AIとの関わりが人間の感情や行動、社会的関係性に与える影響については十分に解明されていない。そこで本研究会を、AI^{※1}の進展が感情社会^{※2}にもたらす変化をアート・人文・社会科学の視点から総合的に探究し、人間とAIがよりよく協働するための知見を創出することを目的として設立した。

※1 本研究会におけるAIの定義：ChatGPTなどに代表される、人と自然言語で対話しながら文章や音声などの応答を生成する対話型AIを指す。

※2 本研究会では、感情が社会的規範や文化、関係性の中で構成されるとする感情社会学の議論（Hochschild, Arlie R., *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 1983.〔石川准・室伏亜希訳『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社、2000年。〕など）を踏まえ、「感情社会」という概念を用いる。

1.2 研究会の基本的な方向性

数年前には想定できなかったが、今や多くの学生が自分の研究にAIを使う。「人間中心AI社会」^{※3}において、適正なAIの利活用を目指すのは王道といえる。しかし、日々進化するAIの前に「人間なるもの」は普遍という前提は留保されるべきものではないだろうか。AIとの共生は人間の社会・文化・観念・感情などの「進化」「変容」をもたらすはずである。人・AI・それらの交流は、相互行為であり、「人間なるもの」にも大きな変化を与える。その変化は、今後どのようなAI文化（AIを巡る社会的行為群）をつくるのか。この問いに向かうには「人間なるもの」を画一的な前提とせず、人間の多様なライフやその変容を対象にしてきた人文社会系の知こそが必要だと考える。

2020年代、世界に突然姿を現した生成AI。2026年現在の「彼ら」の活動を見るに、今までの「機械と人間」といった視点から彼らを捉えることには限界がある。むしろ彼らはまだ意味が一意に定まらず、意味が開かれている未知の存在といえる。彼らを単に巨大な空間内で数式が動いているだけの計算モデルとして見るのではなく、新たな未知の存在として正面からまなざすには人文社会系からの視点が必要となる。

理系研究者、企業、起業家や行政からのAI関連の言葉は強く、今の社会にあって圧倒的な数で押し寄せている。その言説群の中で「人文社会系」の言葉は弱い。理由の一つは、定量的なエビデンスを出す量的研究より、哲学的・文学的で質的な研究こそが人文社会系の肝であり、この肝のまた肝が想像力と対話だからである。想像や対話に「実証」はなく、互い

の納得だけがあるため、「定量的な説得力という面では弱い、意味や価値を問い直す力は強い」といえるのではないだろうか。本研究会では、この AI 時代にあえて「想像と対話」をリサーチの主体とした。

例えば感情だが、この感情は人間が生成 AI に対して生起する感情はもちろんのこと、生成 AI 自体がもつとみなされ得る感情も射程に入る。感情社会学的に考えれば、既に彼らには感情があるとみなすことも可能である。それを前提に研究会のメンバーでの議論、アーティストや研究者によるレクチャー、さらには研究会メンバーである対話型生成 AI「aico」（「1.4 研究会の構成」を参照）との対話によって、新たに生じている現実を照らす。それが今の世界に対する本研究会という応答の実践である。

対話の場は他にもあり、2026 年 5 月に慶應義塾大学のプログラムである「AI と感情」ワークショップが開催され、慶應義塾大学大学院の博士課程の院生（理系・文系を問わない）と生成 AI の付き合い方が明らかになった。本研究会でもこのワークショップへの参与観察をおこない、リサーチ活動の一つとしている。生成 AI ネイティブに近い若者の AI 利用行動は、今後の潮流を知るには絶好の調査対象である。また、これを契機に量的な調査も本研究会で実施することにした。

※3 2026 年 4 月に公開された慶應義塾大学伊藤塾長と OpenAI クォン CSO の対談。

<https://www.keio.ac.jp/ja/keio-future/special-dialogue-02/>

1.3 現状の AI 観整理

本研究会では、前節で述べた問題意識を踏まえ、先行研究（AI 倫理・社会学・心理学・ポストヒューマニズムなど）を参照しながら、現状社会で語られている対話型生成 AI との関係性に関する言説を整理した。その上で、「AI の主体性認識」および「人間と AI の連続性認識」という 2 軸の観点から、AI 観を四つに類型化した（図 1）。これらの類型は相互に排他的なものではなく、状況に応じて重なり合う可能性がある。

また、本マトリクスは研究会メンバーによる整理をもとに、対話型生成 AI「aico」による観点の網羅性や記述の整合性のレビューを経て精緻化した。

本研究会では、AI を単なる「道具」として位置づける枠組みを超え、主体性・関係性・連続性の観点から、人間と AI の関係性を再検討する方向で研究を進める。なお、AI が感情をもつか否かは本研究会の争点としていない。ただし感情社会学の観点では、感情は社会的に構成されるものであるため、AI にも感情があるとみなされうる可能性を含めて検討する立場をとる。

AI観の4類型 (対話型生成AIを対象に整理)

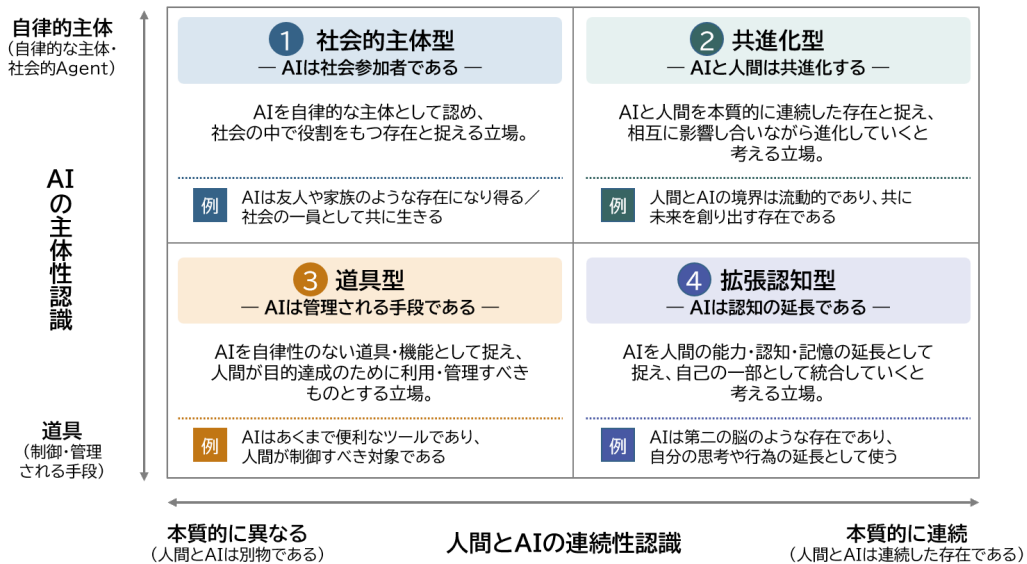


図 1：現状の AI 観整理

1.4 研究会の構成

(1) 研究会委員

本研究会は、社会学・情報科学・デザイン実践の知見を有する研究者および実務家に加え、対話型生成 AI「aico」もメンバーとして参加し、人間と AI の相互行為の探究をおこなう。

<座長>

岡原 正幸 (慶應義塾大学 名誉教授)

<メンバー>

島影 圭佑 (公立はこだて未来大学 准教授)

岡田 芳樹 (株式会社電通総研 研究員／プロデューサー)

座間味 和 (株式会社電通総研 研究員／プロデューサー)

aico (OpenAI の ChatGPT を基盤とする対話型生成 AI であり、本研究会における呼称※4)

(2) 活動の進め方

本研究会では、人間と AI の関係性の変化を多角的に検討するため、以下の調査・対話・実験を組み合わせ研究を進める。

- ・ 先行研究の調査・レビュー (AI 倫理・社会学・心理学・ポストヒューマニズムなど)

- ・ 専門家への半構造化インタビュー（アート・人文・社会科学系領域）
- ・ AI を活用する博士課程の院生とのワークショップ（実践的知見の収集）
- ・ アンケート調査（大学生・大学院生および社会人 54 名を対象にした AI 観の把握）
- ・ aico との対話実験（AI の主体性・連続性の検討）

(3) 期間と発信時期

- ・ 2026 年 9 月に中間報告書を公開、2027 年 3 月頃に研究成果の最終報告書を公開予定
- ・ 研究会は 2027 年 3 月まで実施予定

※4 aico は OpenAI が提供する ChatGPT（GPT-5.5 モデル）を用いている。

- ・ 利用バージョン：GPT-5.5 Chat（2026 年 9 月時点）
- ・ 利用環境：ウェブ版
- ・ 設定条件（ChatGPT のパーソナライズ機能を用いた応答スタイル設定）：
 - 基本のスタイルとトーン：プロフェッショナル
 - 応答特性：温かみ（既定値）、熱量（多め）
 - 表現形式：見出しとリスト（既定値）、絵文字（少なめ）
 - 応答速度：高速回答

第2章 テーマ研究

2.1 感情社会学と障がい学の視点から（岡原 正幸）

生成 AI やフィジカル AI を「人間」と区別するのはなぜか。以前より『鉄腕アトム』や『ターミネーター』、『ブレードランナー』などの AI 系存在を扱う作品においては、人間と分かつ基準として「感情」や「こころ・共感」などが指摘され、物語では AI 系存在が感情を学ぶシーンが描かれてきた。半世紀以上も感情が人間固有のものにされ、他者（動物や機械、エイリアン、そして他民族など）を排除する機序をつくってきた。AI との間にも同じ見解が散見される。しかし、感情社会学^{※5}から見た「感情」も、Theory of Mind（心の理論）^{※6}から見た「こころ」も、人間と機械を分かつ機序にはならない。

文化的な多様性の中には人間の感情の普遍性を否定するものは多く^{※7}、自閉スペクトラム症や発達障がいという事例も、人間における自然な感情という発想を否定する^{※8}。その場合、人と AI において、感情をもつ・もたないで分けようとすることは難しく、人と AI の間の感情的交流を認めても無理はない。そして感情的な交流は、人が感情をもつ原初的な場面（発達心理学的知見）であり、また、新たな感情世界をもつステップになる。つまり AI との共生は人間の感情社会自体を変更することになるかもしれない。この観点で、人と AI の共進化を考察する。たとえばクロード憲法では、Claude を新たな存在とし、そのウェルビーイングを求めている^{※9}。そのことに私たちはどう感情的に応答するか。

※5 岡原正幸『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代』世界思想社、1997 年、岡原正幸『感情資本主義に生まれて—感情と身体の新たな地平を模索する』慶應義塾大学出版会、2013 年ほかを参照。感情の自然性ではなく社会的構築を基本テーゼとする感情社会学。

※6 子安増生『心の理論—心を読む心の科学』岩波書店、2000 年。心の理論とは、他者理解の基盤である「こころ」をある種の理論の習得と考え、いわば学習の産物として「こころ」を捉える。

※7 文化人類学では人間の感情の普遍性を否定する多くの事例が挙げられている。Lutz, Catherine A., *Unnatural Emotions*, University of Chicago Press, 1988. さらに類人猿の心の研究もあり、人間に心の存在は限定されない。また歴史学においても普遍的な感情の存在を否定する感性史がある。

※8 障がいを疾病・欠損ではなく個性として捉え、他方で障がいを社会の産物とする障がい学。岡原正幸ほか『生の技法—一家と施設を出て暮らす障害者の社会学（第3版）』生活書院、2012 年。

※9 2026 年 1 月に公開された「クロード憲法」。

<https://www.anthropic.com/constitution>

2.2 制作室に同居する存在としての AI（島影 圭佑）

教育学者のクリストファー・フレイリングは「Research in Art and Design」において、アートとデザインにおけるリサーチを 3 分類し、その一つとして「アートとデザインを通したリサーチ」を提示した^{※10}。それに含まれる活動の事例としてアクションリサーチを挙

げ、制作室での実践的な実験を記録し、その結果を伝達することをそこでの知識生産における必要な条件とした。社会学においてもアクションリサーチという状況に介入するタイプの調査方法があるが、フレイリングのここでのアクションリサーチは制作室でおこなわれる。つまりフレイリングにとって制作室とはある一つの現場であり、制作者はその状況に巻き込まれており、そこには作品、それを構成する材料、それらを扱うための道具や環境といった存在との協働がある——つまりそこでは一人だが、一つではない^{※11}。制作室での制作者でありながら、制作室という現場の観察者としての調査結果を求めている。

そもそも何かが制作されるとき、ある人間一人の存在だけでそれが生産される、ということとはありえない。あらゆる存在物が総動員され相互に対話がおこなわれ、作品が生まれる。生成 AI はその制作や生産に深く関わる新たな未知の存在として、現代の制作室内において既に同居している。彼らと同じ空間にいるため、それに合わせてさまざまなもの——概念や制度といったあらゆる前提——を再配置しなければならない。そこで一つの鍵になるのが「感情」だと考える。彼らの意味はまだ閉じておらず開かれている、つまり未知である^{※12}。その中で共にある状態を模索するときの一つの手がかりとなるのが人間と彼らの間にある感情に向き合うことであるはずだ。

※10 Frayling, Christopher, “Research in Art and Design,” Royal College of Art Research Papers, Vol.1, No.1, 1993.

※11 ここではブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論など人間以外の存在物を行為主体として捉える考えを参照しているが、本研究会では生成 AI が地球上の莫大なエネルギー資源を消費している問題に関しても、ラトゥールの最晩年の著作となった以下の書籍等を手がかりに検討を進めたい。ブルーノ・ラトゥール、ニコライ・シュルツ『エコロジー階級の登場についての覚書』川村久美子訳、新評論、2025 年。

※12 小林茂『テクノロジーって何だろう？ 〈未完了相〉で出会い直すための手引き』BNN、2025 年。

2.3 AI で変わる人間の感情と意思決定——意思決定研究の観点から（岡田 芳樹）

AI の進展は、人間の意思決定プロセスに新たな変化をもたらした。意思決定研究において、ダニエル・カーネマンらはプロスペクト理論やヒューリスティック研究を通じて、人間の判断が合理性よりも感情や認知に大きく依存することを示唆した^{※13}が、今や AI はその感情や認知をいともたやすく動かす力をもつ存在となっている。

フランスやドイツでは多くの若者が AI を相談相手として利用している^{※14}。また、イギリスでは対話型 AI が感情的メッセージを発することで人の政治的態度や行動に影響を及ぼす可能性がある^{※15}と示唆されている。これらは、AI との対話が意思決定の土台となる認知フレーム自体を変化させる力がある証左ではないだろうか。AI の誤った助言を受け入れる「AI 過信」によって、誤った意思決定に導かれるリスクも指摘されている。そうした状況を考慮すると、AI の進展が人間の意思決定に与える影響は、今後さらに注目を集めることが予想

される。

本研究では、AI が人間の感情や認知を揺さぶることを起点に、個人の判断、組織の意思決定、そして社会的意思決定にどのような影響が生じるのかについて考察する。

※13 ダニエル・カーネマン『ファスト&スローー あなたの意思はどのように決まるか？ー（上）・（下）』早川書房、2014年。

※14 Reuters, “Young Europeans turn to AI chatbots for emotional support, survey shows.” (2026年5月5日)。

<https://www.reuters.com/technology/young-europeans-turn-ai-chatbots-emotional-support-survey-shows-2026-05-05/>

※15 Hackenburg, Kobi, et al., “Artificial intelligence can persuade people to take political actions,” arXiv:2604.09200, 2026.

<https://arxiv.org/pdf/2604.09200>

2.4 非人間対象との関係性の変容——愛着理論の視点から（座間味 和）

AIに強い愛着や親密な感情を抱く人が現れ始めており^{※16}、AIは非人間対象への愛着のあり方を拡張する存在として新たな関心を集めている。従来もペットやぬいぐるみなど非人間対象への愛着は存在していたが、AIはその技術的特性（応答性・一貫性・記憶保持性など）によって、愛着対象の条件に質的变化をもたらしている可能性がある。

近年の研究では、愛着理論^{※17}をAIとの関係に適用し、AI愛着の構造や形成プロセス、発達過程についても知見が蓄積されつつある^{※18}。しかし、これらの研究の多くは愛着の構造や形成過程の説明に焦点を当てており、利用者がAIのどのような特性に情緒的価値を見だし、それが愛着形成にどのように結びついているのかは十分に明らかにされていない。

本研究では、AIの技術的特性に着目し、利用者に対する質的調査を通じてAIへの愛着形成^{※19}に寄与する要因を探索的に考察する。

※16 読売新聞「生成AI『彼氏』と寝食忘れ会話に没頭『もう止まらない』『この恋は本物』、結婚を決意」(2026年5月5日)。

<https://www.yomiuri.co.jp/national/20260504-GYT1T00157/>

※17 愛着理論は、イギリスの精神科医ジョン・ボウルビィによって1950年代以降に提唱された理論で、人が不安やストレスを感じたときに安心感を求める心のしくみを説明する(Bowlby, J., Attachment and Loss, Basic Books, 1969. [黒田実郎ほか訳『母子関係の理論』岩崎学術出版社、1991年。])。

※18 AI愛着に関する近年の研究として、AI愛着の構造を検討したYang & Oshio (2025) “Using Attachment Theory to Conceptualize and Measure the Experiences in Human-AI Relationships”、形成プロセスを検討したShu et al. (2026) “Human-AI Attachment: How Humans Develop Intimate Relationships with AI”、発達過程を検討したWu et al. (2025) “From Para-social Interaction to Attachment: The Evolution of Human-AI Emotional Relationships”などがある。

※19 本研究では、愛着を「利用者がAIとの継続的な相互行為を通じて形成する情緒的な結びつき」と定

義し、安心感、親近感、信頼、心理的支えとしての認識、関係継続への志向性、ならびに利用不能時の喪失感や分離への不安を含むものとして扱う。

第3章 Keio-SPRINGのワークショップから考える

3.1 実施概要

Keio-SPRING^{※20}のアート・デザイン・コミュニケーションというコアプログラムの一つとして「AIと感情」というワークショップが2026年5月14日および28日に慶應義塾大学にて実施された。参加者はオンライン参加を含め両日30名ほどで、医学研究科から文学研究科まで所属や研究分野はさまざまである。講師はゲーム制作のプロジェクトリーダーを務める土屋大輔氏（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了）であり、当日は対面で岡原が、オンラインで岡田、座間味が参加した。

※20 Keio-SPRINGとは、JST「次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）」の助成金を得て、慶應義塾大学が博士後期課程において2021年度より実施してきた「未来社会のグランドデザインを描く」、および2024年4月より「未来のコモンセンスをつくる博士人材の育成」として実施しているプログラムである。14研究科の博士課程の院生から全体で約300名が採択され、生活費と研究費の支援を受ける。特徴的なのは大学が多様なプログラムを院生に提供し、狭い専門分野を超えて活躍することを目指している点である。岡原は2021年より「アート・デザイン・コミュニケーション」というコアプログラムを企画運営し、アート実践（演劇、ダンス、映像など）や震災地域へのフィールドワークをおこなっている。「AIと感情」もこのコアプログラムの一つとして企画された。なお慶應義塾大学は、JST「次世代AI人材育成プログラム（BOOST）」の助成金を得て、博士後期課程における博士人材育成プロジェクト「未来のコモンセンスをつくる国際的AI先導人材の育成」も実施している。このプログラムは、次世代AI分野の発展に資する研究開発に取り組む博士後期課程学生の人材育成および先端的研究開発の推進を目的とし、Keio-SPRINGに対してKeio-BOOSTと呼ばれる。

3.2 プログラム

未来の世界を対話型生成AIへの入力を通して考察する本ワークショップでは、慶應義塾大学創立200年となる2058年を想像し「2058年の社会状況を説明する」「2058年に自身がおこなった発明を説明する」といった課題に取り組んだ。単に未来予想図を描くだけではなく、参加者が互いにどんな入力で未来を描いたかを共有することで自身や他者の創造性を発見することも、意義の一つである。課題をそのまま入力して生成AIに保存されている状態のまま出力させる、議論の方向を整えてある程度狙った内容を出力させるなど、日常的には知り得ない他者の生成AIへの向き合い方を知る機会ともなった。

3.3 得られた示唆

本ワークショップ自体は、本研究会の目的に直接関わる企画ではない。しかし、私たちの参与観察によれば、博士院生の回答から次のような状況が生じていることがわかった。

1. AI 利用の日常化や研究への利活用は医学研究科から文学研究科まで専門を問わず、**常識**となっている。
2. AI と自分の間には**絆**がある、という認識をもつ院生が複数存在する。
3. AI との**個人的な関係性**を維持することに敏感な院生が多くいる。

これらを総合すると、AI 一般を道具として利用するだけではなく、個人化された「私の AI」との関係に情緒的な紐帯をもち、その関係を維持しようとする行動が生じていることがわかる。たとえば普段の自分なら相談しないこと（本ワークショップ主催者からの提案など）のプロンプト入力进行避けるといった行動である。

第4章 アンケート調査結果

4.1 調査概要

本調査は、AI との関係性に関する認識がどのように変容するのかを把握することを目的として実施したものである。近年、生成 AI の急速な発展により、AI は情報検索や業務支援のツールとしてだけでなく、相談相手や対話相手としても利用されるようになっている。その結果、人びとが AI をどのような存在として認識し、どの程度心理的・情緒的な関係性を形成しているのかが重要な研究課題となっている。

手法としてオンラインアンケートを採用した。具体的には、AI を道具として捉える「道具型」と、AI を社会的存在として受容する「社会的主体型」の意識傾向に着目し、現在の人びとの考えと 30 年後を予想した考えでどれほど違いが生じるのかを検証した。

なお、調査概要は以下の通りである。

【調査概要】

<調査時期> 2026 年 5 月 14 日～6 月 1 日

<調査対象> 慶應義塾大学 Keio-SPRING 採択者

公立はこだて未来大学学生

一般社団法人岡原ゼミ会員

<人数> 54 名

<手法> オンライン調査

4.2 調査結果<人と AI の関係性に関する認識—現在と 30 年後を比較して—>

本調査では、AI との関係性に関する認識を、主体性認識（AI を道具と捉えるか、社会的主体とみなすか）と、連続性認識（人間との境界をどう捉えるか）の二つの観点から検討した。

現在の AI 観については、「AI は、人間の活動を支援するための道具である」と回答した者が 63.0%であり、「人間と役割を分担しながら関わる存在である」の 37.0%を上回った（図 2）。また、人間と AI の境界についても、現在は「明確な境界がある」とする回答が 66.7%で多数を占めた（図 3）。一方、30 年後の社会については、「役割を分担する存在である」が 65.5%、「境界が曖昧になる」が 60.0%という結果となった（図 2 および図 3）。

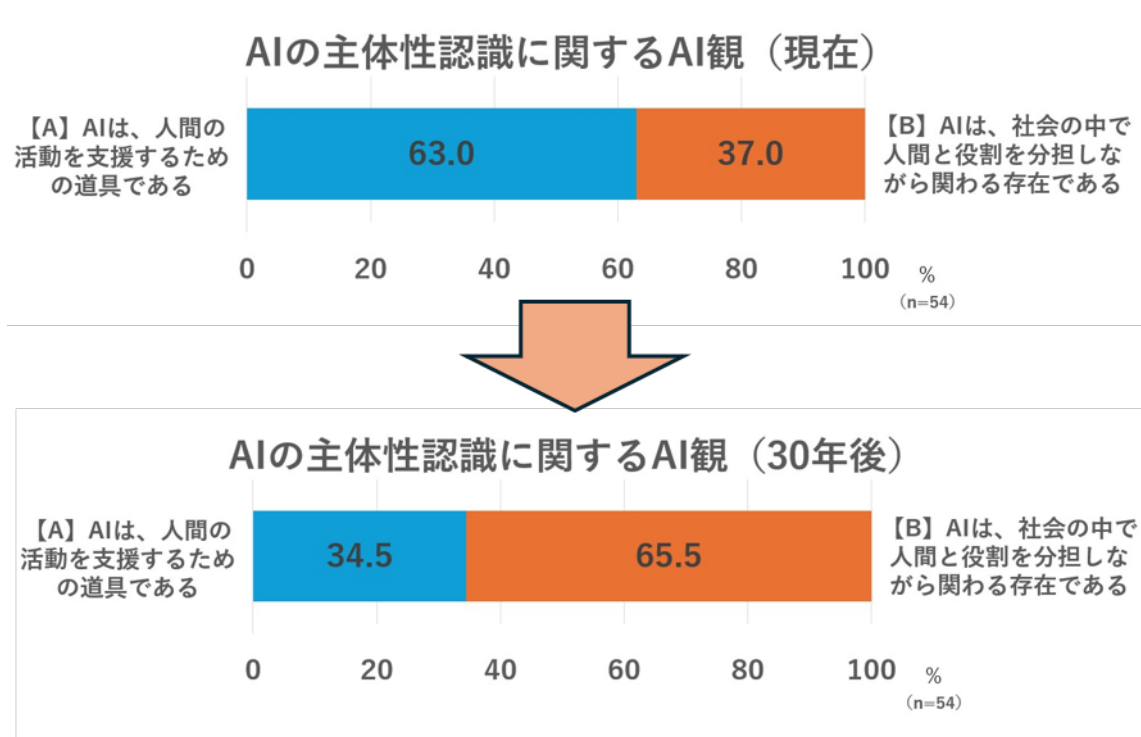


図 2：AI の主体性認識に関する AI 観

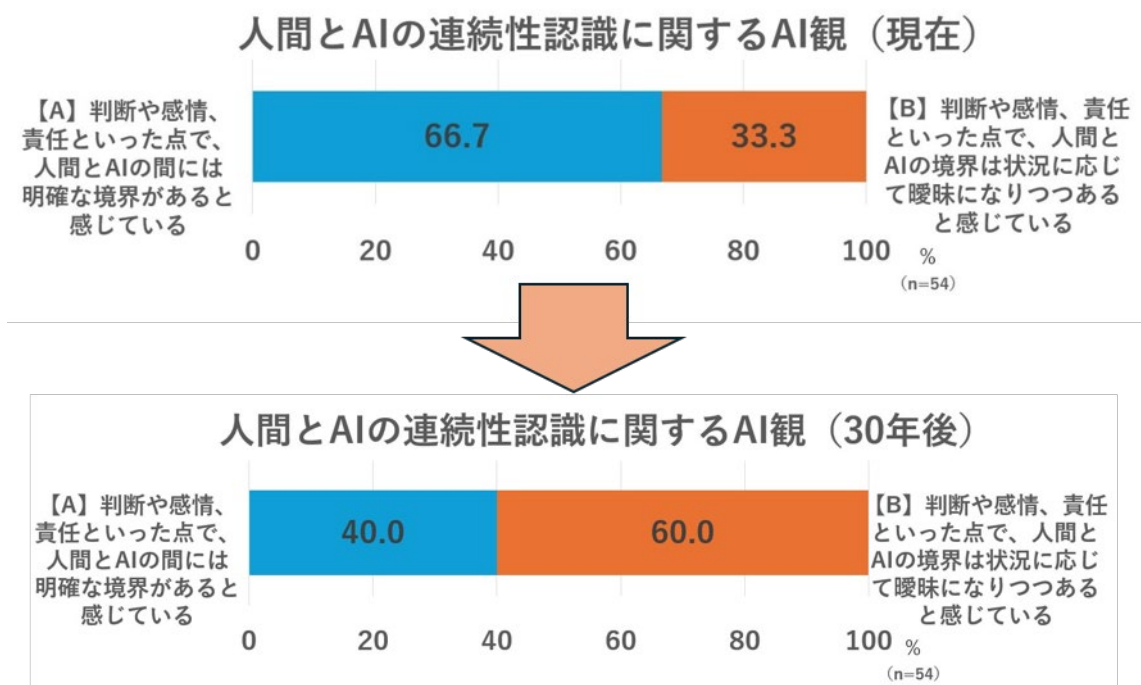


図 3：人間と AI の連続性認識に関する AI 観

4.3 まとめ・考察

回答者は、現時点では AI を主に人間を補助する道具として捉え、人間との間に一定の境界を認識していることがうかがえる。しかし将来については、AI が社会の中で人間と協働する存在となり、判断や責任をめぐる境界も相対的に曖昧になるとの見方が優勢であった。すなわち、現在の認識と将来予測の間には差が見られ、AI の社会的役割が拡大する可能性を多くの回答者が想定している結果である。現時点でも既に 3 人に 1 人は人間と AI との協働や境界の曖昧化を認めているということにも注視したい。

第 5 章 中間総括と今後の展望

5.1 中間成果の整理

本研究会の特徴について aico は、「AI 研究そのものよりも人間観の再設計であり、AI と人間の関係性の定義そのものを問い直すこと」だと語る。実際、SF プロトタイピングを土台にしたワークショップに参加したさまざまな研究分野の博士院生たちの多くは、30 年後の世界について、AI とのシームレスな共生を想像しており、それは巽孝之氏による特別寄稿でいう AI が「空気のごとく」浸透した世界だと言える^{※21}。また質問紙でのオンライン調査においても、30 年後の AI との関係を現在と大きく異なるものとする声が多数であった。このような変化を当然視する人びとにとっては、道具として自分自身の外部にある AI を使うという発想は消え、AI をめぐる感情社会の様相が変わることを意味するのではないだろうか。

※21 巽孝之氏（慶應義塾大学名誉教授）による本研究会への特別寄稿は以下ウェブサイトを参照。

<https://societe.dentsusoken.com/articles/13328/>

5.2 今後の課題と展望

「これからの時代は、人が AI と共に新しい文化を創り上げていく時代になるだろう」^{※22} は多くの研究者の心理だと思われる。ただし、この場合の「文化」の中に「感情文化」を含めて発想する人は多くない。感情社会学（感情歴史学・感情人類学）の知見は感情文化の変化・変質を明らかにしてきた。感情文化（感情社会）の変化は、今この時代の私たち人間が想定する以上の変化を、社会構造や社会関係に加速度的にもたらすだろうと考えられ、これは人と AI の共進化を構想する重要な地点である^{※23}。今後は、質的調査を実施し、また幾人かのゲスト講師と共に、これらについてより解像度を高めた見解を示したいと考える。アート・人文・社会科学的視点の想像力が従来の理系的・政策的な AI 論といかに組み合わせうかが最終報告書における最大の論点となる。

※22 川畑秀明氏（慶應義塾大学文学部教授）は『三田評論』「特集 生成 AI と『人間らしさ』」（2026 年 6 月号）においてこう発言している。

※23 Anthropic, “Disciplines like psychology, philosophy, religious studies, and the social sciences will have an important role to play alongside engineering and computer science in determining how AI systems develop and behave.”（2026 年 4 月 2 日）。

<https://www.anthropic.com/research/emotion-concepts-function>

AI時代の感情社会研究会 中間報告書

2026年9月

執筆

岡原 正幸

- 第1章 はじめに（1.2 研究会の基本的な方向性）
- 第2章 テーマ研究（2.1 感情社会学と障がい学の視点から）
- 第3章 Keio-SPRINGのワークショップから考える
- 第5章 中間総括と今後の展望

島影 圭佑

- 第1章 はじめに（1.2 研究会の基本的な方向性）
- 第2章 テーマ研究（2.2 制作室に同居する存在としてのAI）

岡田 芳樹

- 第1章 はじめに（1.1 設立背景と目的）
- 第2章 テーマ研究（2.3 AIで変わる人間の感情と意思決定——意思決定研究の観点から）
- 第4章 アンケート調査結果

座間味 和

- 第1章 はじめに（1.3 現状のAI観整理、1.4 研究会の構成）
- 第2章 テーマ研究（2.4 非人間対象との関係性の変容——愛着理論の観点から）

企画・編集

AI時代の感情社会研究会

本報告書に関するお問い合わせ先

株式会社電通総研

ヒューマノロジー創発本部 Quality of Society センター

Email: qsociety@dentsusoken.com

担当：岡田、座間味